全国災対連・石川災対連合同ニュース

能登半島地震支援
「全国災対連・石川災対連」現地事務所
〒925-0026　石川県羽咋市石野町ト13-1
TEL０８０－８８８９-３４０２　Mail:z-shinsai@zenroren.gr.jp

2024年４月２４日
ＮＯ．２

第２次支援ボランティア

家屋の取り壊しは 400～500 万円の自己負担？

4 月 19 日、第 2 次支援ボランティアの初日の行動には生協労連、全労連・全国一般、医労連、国公労連、自治労連、全教、神奈川労連、愛労連、石川県労連、全労連常任幹事と事務局員らあわせて 25 人が参加した。

初日の行動は、被災された建交労の組合員の方のご自宅を片付ける作業のお手伝いをするために珠洲へ。

道中の能越自動車道の下り（行き）は、反対車線も使ってなんとか車が片側通行できるようにした状態。道はガタガタで、車のスピードを落としても揺れが大きく運転には注意が必要な状況でした。道すがら重機を使って作業中の作業員の方々を多数見かけた。道路の完全復旧にはほど遠く、まだまだマンパワーも時間も必要な状況。いま万博に使っている資源は、ぜひ能登のために投入してほしい。

被災された組合員のご自宅は海沿いにあり、津波で浸水の被害を受けたため、現状では生活できるような状況になく、ご家族のうちご子息以外はみな避難所である町内の集会所に身を寄せており、ご子息はご友人宅に居候させてもらっているとのことだった。周囲の住宅もみな被害を受けており、一部の家以外はほとんどが避難生活を強いられている。パートナーと別々に避難せざるを得なくなる方もいらっしゃるそうで、震災はコミュニティや人間関係にも大きな影響を与えていることを感じた。

ボランティアのみなさんが担当したのは、浸水して使いものにならなくなった畳や冷蔵庫・洗濯機などの大型家電を運び出して、車に積み込んで所定の集積場まで運ぶ作業。多数の参加があったため、作業は滞りなく順調に進んだ。被災された組合員のご一家は、津波で所有していた自家用車を 2 台とも流されてしまっており、こうした作業ができなかったということもあってか、とても丁寧なお礼と感謝の言葉を頂いた。お届けしたお米や水などの救援物資もたいへん喜ばれた。

作業後に被災後の状況について色々なお話を聞くことができた。被災した住宅を取り壊すための支援を受けるには、罹災証明を取る必要があり、損壊の状況・程度に応じて 6 段階のランク付けがなされる

（全壊、大規模半壊、中規模半壊、半壊、準半壊、一部損壊）。被災した組合員のご自宅は、家自体が沈下しており、**写真**の通り家屋が傾いて隣家に接触してしまっている状態だ。屋内も津波による浸水で大きなダメージを受けているが、判定は最も軽度な「一部損壊」。この判定では公費での取り壊しができず、費用は自己負担となる。受け取れるのは不十分な額の支援金のみで、**自費での家屋の取り壊しには、概算で 400～500 万円もの額の負担**になってしまうということであった。再建ではなく、取り壊し作業がこんな大きな額の自己負担になってしまうというのは、一体どういうことなのだろうか。組合員のご自宅の隣家は、外観上は大きな損壊はないように見受けられるものの、初回の判定で既に公費による取り壊しが可能との判定を受けている。被災された組合員の方は納得がいかないため、3 度目の判定のやり直しを申請することを考えているとのことだった。なぜこんな判定になってしまうのか。参加された元自治体職員の組合員の方は、「先日財務省による能登復興に際しての『維持管理コストを念頭に置き、集約的なまちづくりを』という提言からもわかる通り、国がコスト削減の方針を打ち出しており、そのため自治体職員も判定を厳しくせざるを得なくなっているのではないか」と話した。

支援に参加して能登の実態を持ち帰り、広げてほしい

全教の鈴木憩子さんは「地震や津波は不可抗力だけど、その後が…。**全壊だろうが半壊だろうが、住めないものは住めないのだから、お金をだすべき**だと思います」「生活が壊されるというのがどういうことなのかをまざまざと見せつけられました。**東日本大震災の時には宮城にボランティアに入ったが、たくさんの団体がいてさかんに活動していたのに、能登ではほとんどみかけませんでした。**現地ではボランティアをまわすシステムが十分に機能していないように感じました。これは本来行政の仕事ではないかと思いますが、公共がくいつぶされてしまっているため、できなくなってしまっているのではないかと思います」と話してくれた。

2 日目は珠洲と能登町の二手に分かれての作業となった。珠洲に向かったグループは被災された建交労の組合員の方のお宅を 2 件訪問し、損傷した住宅の片付け作業のお手伝いを行った。1 件目のお宅は

海岸沿いにあったが、運良く津波の被害を免れることができた。しかしながら、揺れによって室内は大きく損傷。前回のボランティア作業で大型の家具などは処分済みであったため、今回は中～小型の家具や食器類などを車に積み込み、集積場に運んで処分した。2 件目のお宅ではまだ片付け作業が進んでいなかったため、主に大型のタンスなどを積み込んで処分した。

集積場ではかなり厳密なゴミの種別分類が必要とされ、それがされていない受け付けてもらえない。日常の生活の中であればゴミの分類は必須だが、こうした非常事態の中でぐちゃぐちゃになってしまった家屋の中での分類作業は、かなりの労力を要する。特に高齢者世帯にとっては非常に大変な作業なのではないか。過去に被災地のボランティアに入った元・自治体職員の組合員によると、こうした災害時には特例として厳密な分類を求めないケースもあったそうだ。街中に倒壊した住宅の大半が手付かずの状態で残っているにもかかわらず、私たちのほかに片付け作業に従事するボランティアらしき人たちを数えるほどしか見かけなかった。こうした厳密な分類が片付け作業の遅れの一因となっている可能性があるのであれば、改善が必要なのではないかと感じた。

3 日目は大きな火災のあった輪島の朝市の状況を視察。**写真**の通り、元はどんな街並みだったのか全く窺い知ることができない。一瞬まるで映画のセットであるかのようにも感じたが、これは紛れもない現実。 被害の大きさを実感したとともに、復興以前に復旧からも程遠い状況だと感じた。石川県労連の長曽輝夫事務局長は**「支援活動と共に能登の実態を持ち帰って広めてもらうという意味でも、ぜひボランティアに参加してほしい」**と語った。

以　上